

平成21年 4月14日現在

研究種目： 基盤研究 (C)  
 研究期間： 2007～2008  
 課題番号： 19520192  
 研究課題名 (和文) ブレイクの複合芸術においてコントラポスト体位をとる女の表象  
 研究課題名 (英文) Women in *Contraposto* in Blake' s Composite Art  
 研究代表者 今 泉 容 子 (IMA-IZUMI, YOKO)  
 筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授  
 研究者番号： 40151667

## 研究成果の概要：

この研究の目的は、イギリスロマン派詩人・画家ウィリアム・ブレイク (William Blake) の複合芸術作品に頻出する人間の「体」の「ポーズ」に注目し、とりわけ裸体の女がとる「コントラポスト」というポーズの意味を解明することであった。

ブレイク作品の人物の体には、動きがある。それらの体は、立っているときでさえ、うねったり曲がったりする。コントラポストという体位が意図的にとられたことに意味を見出そうとした本研究は、ブレイク研究における「女」の表象研究をさらに一歩進める成果を出せたはずである。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	1,900,000	570,000	2,470,000
平成20年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード： ブレイク、複合芸術、女、コントラポスト、18世紀

## 1. 研究開始当初の背景

片足に重点をかけて体をゆるいS字カーブ状にこなわせるコントラポストのポ

ーズは、ブレイクの複合芸術において女たちがとっている。そのコントラポストの意味は、まだ解明されておらず、挑戦する価

値があると考えた。

そもそも、片足を重点をかけて体をゆるいS字カーブ状にこなわせるコントラポストのポーズは、芸術作品における裸の女の初出例であるアフロディテが取ったことから、「裸の女」と深い関係にある。しかし、ブレイク作品において、「コントラポスト」体位の登場人物は、はじめから「裸の女」だったわけではない。

そこで本研究では、まずブレイク作品におけるコントラポスト体位の登場人物たちの変遷を解明することから出発することにしたのである。

## 2. 研究の目的

この研究の目的は、イギリスロマン派詩人・画家ウィリアム・ブレイク (William Blake) の複合芸術作品に頻出する人間の「体」の「ポーズ」に注目し、とりわけ裸体の女がとる「コントラポスト」というポーズの意味を解明することだった。

それは同時に、ブレイク作品におけるコントラポスト体位をとる登場人物たちの変遷を明らかにすることでもあった。

ブレイクの初期の作品において、コントラポスト体位をとるのは、じつは成人の女たちではない。小さな男の子たちである。具体的にどの作品のどこに、どのような状況のもとで、男の子のコントラポストが出現するかを検出することが、本研究の前半の主要な目的となった。

その男の子のコントラポストが、後期の作品になると、なぜ成熟した女たちのコントラポストに取って代わられるのか。女たちがコントラポストの主演となるプロセスを明らかにすることが、本研究の後半の目的となった。

こうして、ブレイクの複合芸術作品の前期から後期において、コントラポスト体位の意味の変遷を解明することが、最大の目的となっていた。

## 3. 研究の方法

考察の対象とした作品は、「彩飾詩」と称されるブレイクの複合芸術作品の全体であり、初期から後期にいたる14作品であった。

それらの作品のなかに検出されるコントラポスト体位の登場人物たちに、ブレイクがどのような意味を与えたかを明らか

にする、という方法をとっていった。

まず、初期の抒情詩作品において、コントラポスト体位をとるのは、女たちではなく、小さな男の子たちであることに着意した。その出現例を検出したところ、コントラポストの男の子たちは、裸ではなく、みな服を着ているが明らかとなった。

『無垢と経験の歌』(1792年)の「子羊」や「羊飼い」における少年たちが、その例である。

なぜ、初期の例では、コントラポスト体位をとる人物が、(コントラポストにつきものの)「裸」ではなく、着衣の姿なのか。その意味をさぐることが、研究計画の初期段階の重要な課題となった。

初期の抒情詩作品がつくられた時期と多少重なるが、ブレイクは「予言書」とよばれる詩群の初期作品の制作にとりかかった。その予言書群は、前期から後期にいたるにつれて、大きく変質していった。とうぜん、コントラポストの意味も変化していったはずだと考え、そのことを立証するための研究計画が練られた。

予言書群の「初期」作品では、『セルの書』(1789年)に見られるように、「少年」ではなく、「少女」がコントラポスト体位をとっている。ただ、服はやはり着たままである。男の子から女の子へとジェンダーの変化があったことを重視し、そのジェンダーの変化に有意な意味が見出せるかどうかを考察した。しかし、両者はともに着衣であり、セクシュアルな意味が介入してこない点において、共通性のほうが高いことが明らかになった。

ここで、本研究は後半の研究計画を実践する段階にいたる。

予言書中期には、どのような登場人物がコントラポスト体位をとって出現するかを検出することから、本研究の後半がはじまった。小さな男の子や女の子に取って代わって、まもなく成熟した男と女がコントラポスト体位をとって登場するようになる。

『ヨーロッパ』(1794年)のコントラポスト体位の女は、まだ服を着ているが、同年につくられた『ユリズンの書』(1794年)では、とうとう「裸の女」がみごとなコントラポストを披露するようになる。

その成熟した女がコントラポストを示すようになる時期に、ブレイクは重要なコントラポストの裸体の女の彫版を、彫版画師として依頼されている。その仕事は、1791年にはじまり、1796年に完成したのであるが、当時かなりの売れ行きを記録したジョン・ステッドマン著の『スリナム物

語』の最後を飾るイラストの彫版をまかさされたこと。そこには、三人の裸体の女たちが、コントラポストの体位をとって大きく描き出されているのである。このステッドマンが描いた三人の女の下図（「アフリカとアメリカに支えられるヨーロッパ」）にブレイクが影響を受けたことはまちがいになく、この時期以降、ブレイクが自らの作品に描く女たちに、コントラポストのポーズが多くなるのである。

『スリナム物語』の彫版とブレイクの予言書の制作との関係を、女のコントラポスト体位という視点から解明することが、研究計画に盛り込まれた。

ブレイクの後期の予言書作品になると、いよいよコントラポストの女たちは多数出現するため、彼女たちがそのポーズによって意味することを分析することが、本研究の最終段階となった。

女が裸体であることは、ブレイク作品において、一貫してポジティブな意味をもつ。それが、コントラポストという体をくねらせるポーズが加わると、たいていの場合、ネガティブな意味に変転してしまう。正確に言えば、体をくねらせる度合いが強ければ強いほど、悪しき「セクシュアル」な意味がこめられて、ネガティブな存在となるのである。したがって、コントラポスト体位の女でも、体のくねらせかたが経度であれば、ポジティブな意味のまま表象され、大きなくねらせかたになると、ネガティブな存在となるのである。

ブレイクのコントラポストの女たちの表象論をまとめることに、本研究の最後の時間がついやされた。そのさい、ブレイクの初期から後期にいたるコントラポストの意味の変化が、「セクシュアル」というキーワードを用いて解明されることになったのである。

#### 4. 研究成果

本研究で明らかになったことは、当初予測していたように、ブレイク後期の予言書群に多く出現する「裸の女」たちのコントラポスト体位には、独特の意味・メッセージがこめられていたということである。

ただ、コントラポストの女たちには2種類が存在することが明らかになったため、一括りで「コントラポストの女たち」とは言えないことも、明らかになった。

ブレイクは『ジェルサレム』（1804年）にとくに多くのコントラポスト像を出現

させたが、まず1種類目の女たちは、いわゆる「謙虚なヴィーナス (Venus prudica)」のコントラポスト体位をとっている。後期の予言書『ジェルサレム』（1804年）のキャンペル（『ジェルサレム』81葉）はその例である。乳房と性器を手で覆い隠そうとする「謙虚」にたいして、ブレイクはポジティブでもネガティブでもない態度をとっている。

問題は、「謙虚」からほど遠く、裸体を大きくくねらせ、豊満な乳房を揺らすコントラポストの女たちである。その女たちを、わたしは仮に「大胆なヴィーナス」と名づけ、その代表的な例ヴェイラ（『ジェルサレム』47葉など）を分析した。

ヴェイラに代表される「大胆なヴィーナス」は、ブレイク独自のアレンジであり、ブレイクがモデルとしたイタリア美術に先例は存在しないことも明らかになった。

ブレイク作品において、大胆に体をくねらせる官能的な「大胆なヴィーナス」たちが登場するシーンでは、たいてい男が墮落してしまう。すなわち、コントラポスト体位の女たちは、ブレイクにとって墮落のシンボルとなり、「大胆なヴィーナス」のコントラポスト体位が出たら、男たちよ、警戒せよ、というメッセージがこめられていることが、明らかになった。

コントラポスト体位の女たちが、ブレイクが非難する「女の意志」(Female Will)たちと重なる存在であることも、偶然ではない。

このようにブレイク作品の女の体の動きに着目し、立っているときでさえ、うねったり曲がったりする（つまり、コントラポスト体位をとる）ことに意味を見出そうとした本研究は、ブレイク研究における女の表象研究をさらに一歩進める成果を出せたと思う。

また、ブレイクの複合芸術作品における男女のコントラポスト体位の比較も試みた。ブレイクの男の登場人物が立つときは、シンメトリの端整な形となることが多く、コントラポスト体位の人物は少ないことがわかった。それにたいして、女の登場人物が立つときは体をくねらせ、乳房をおおきく揺らすポーズが多いのである。男と女では、ブレイクがその体位にこめたメッセージが異なる。

最後に明白にしておきたいのは、本研究は従来のブレイク研究が目指した方向とは、はっきりと異なっている点である。ブレイク作品における「体」の研究は、じつは Northrop Frye が *Fearful Symmetry* (1947)を著し、S. Foster Damon と David

V. Erdman がそれぞれ *A Blake dictionary* (1965) と *Concordance* (1967) を出して、ブレイク研究を飛躍的に推進させたところから、行われてきていた。そうした研究は「ブレイク神話」という「抽象的な」概念の総体を解明することを目指したため、「体」の考察は必然的に概念的なものとなり、「体は魂の再生基盤である」とか、「理想的な体は四重である」という解明がなされた。

もちろんそれは有益であるが、同時に、ブレイクが非常にフィジカルな芸術家であり、彼の芸術における「体」がフィジカルな肉のかたまりとして描かれている点を、じゅうぶんに認識する必要があるとわたしが思った。したがって、本研究はブレイク作品におけるフィジカルな「体」を中心にすえ、その動きやポーズに着眼したものとして、伝統的なブレイク研究から一歩、前へ足を踏み出す試みだったとも言えよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

今泉容子 「ウィリアム・ブレイクと DVD 研究資料とセクシュアリティ」、『国際日本研究』、査読有り、創刊号、2009 年、pp23-52.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

今泉 容子 (IMA-IZUMI, YOKO)  
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・教授  
研究者番号： 40151667